

満洲文字の文字表をめぐって(5)

—無圏点満文の  $\bar{u}$  と  $n$  と  $k, g, h$ —

吉池孝一 中村雅之

はじめに

中村：前回は母音調和がどのような現象であるか確認し、次いで有圏点新満文の母音調和に関する三つの説をみました。そのうち二つの説においては、音韻論の観点からの母音調和と、文字の観点からの母音調和が一致しないわけですが、そうすると入門者にとって理解が困難となります。そこでわれわれは、音韻論の観点から、母音については6種の音声 [i, e, u, ʊ, o, a] につき、/i, e, u[u, ʊ], o, a/の5母音を区別し、子音については6種の音声 [k, q, g, ɣ, x, ʒ] につき、/k, g, x/と/q, ɣ, ʒ/の2系列の子音を区別する立場に立ちつつ、次のように文字の観点からの表示と一致させました。ローマ字はメレンドルフ式の翻字を用います。

男性母音 a, o

女性母音 e

中性母音 i, u( $\bar{u}$ )

吉池：前回で、母音について一段落着いたので、今回から子音について、「満文原檔」のモンゴル語文と無圏点満文、それに有圏点新満文を比べてみようということでした。

中村：前回、有圏点新満文の  $\bar{u}$  をめぐって議論したわけですが、そのとき次回の宿題として「満文原檔」の無圏点満文の  $\bar{u}$  がどのように用いられているかということの検討が残りました。無圏点満文の  $\bar{u}$  の用法を理解しておくことは、有圏点新満文における  $\bar{u}$  の用法の理解に欠かせないので、子音の検討に入るまえに触れておきましょう。

「満文原檔」における  $\bar{u}$  の用法

中村：早田輝洋(2011)<sup>1</sup>は「満文原檔」の無圏点満文の文字を調査したのですが、 $\bar{u}$  の用法についてどのように説明しているのでしょうか。

吉池：早田輝洋(2011)ですが、これ以後は早田輝洋(2011a)と呼びましょう。早田輝洋(2011a)を受けて、早田輝洋(2011b)<sup>2</sup>において、 $\bar{u}$  の用法にかかわる「満文原檔」の詳細

<sup>1</sup> 早田輝洋(2011)「満洲語と満洲文字」『言語教育フォーラム第24号 言語の研究Ⅱ—ユーラシア諸言語からの視座—』大東文化大学語学教育研究所、1-35頁。

<sup>2</sup> 早田輝洋(2011b)『満文原檔』の表記に現れた種々の問題—第1冊荒字檔・戻字檔を中心に—『言語教育フォーラム第24号 言語の研究Ⅱ—ユーラシア諸言語からの視座—』

な調査がなされています。次に表 1 として早田輝洋(2011b)中の表(18)を引用します。この表は『満文原檔』第 1 冊目(荒字檔と戻字檔よりなる)中の母音文字  $\mathfrak{u}$  と  $\mathfrak{u}$  が、後の有圈点新満文の、どの母音に相当するかを調査したものです。表 1 の左端の  $\mathfrak{u}$  は、「満文原檔」中の無圈点文字  $\mathfrak{u}$  と  $\mathfrak{u}$  の早田式の転写です。{o} {u} {u} は、無圈点文字  $\mathfrak{u}$  と  $\mathfrak{u}$  に対応する有圈点新満文のメレンドルフ式翻字、/o/ /u/ /u/ は早田氏が設定する有圈点新満文の母音音素です。【】は対談者が補ったものです。

表 1. 「(18)母音文字  $\mathfrak{u}$  の第 1 音節中の使用頻度」(早田輝洋(2011b)49 頁より)

【無圈点】 $\mathfrak{u}$ 【 $\mathfrak{u}$ , $\mathfrak{u}$ 】	【有圈点】			計
	{o}	{u}	{u}	
	/o/	/u/	/u/	
男性語	12	42	2	56
女性語(含中性語)	0	<u>2,338</u>	16	2,354
計	12	2,380	18	

早田輝洋(2011b)には、文字  $\mathfrak{u}$  【 $\mathfrak{u}$  と  $\mathfrak{u}$ 】の用法について次の言及があるので紹介しておきます。「無圈点表記に  $\mathfrak{u}$  【 $\mathfrak{u}$  と  $\mathfrak{u}$  : 対談者注】の文字を/o/でなく/u/を表すために徹底して用いればそれなりの効果はあったはずであるが、蒙古文字である以上は初めから女性語標識という意識も強く、それを改めるまでには至らなかったのであろう。」(48-49 頁)。

「文字  $\mathfrak{u}$  【 $\mathfrak{u}$  と  $\mathfrak{u}$  : 対談者注】は優れて女性語的であり、男性語に用いられても狭母音に用いられる傾向がある。」(49 頁)。

中村：表 1 をみると、「満文原檔」1 冊目に現われる  $\mathfrak{u}$ ,  $\mathfrak{u}$  の総計が 2,410 で、そのうち 2,354 が女性語(含中性語)に用いられています。女性語と中性語の割合が分からなければ確かなことは言えませんが、男性語への使用が極端に少ないことから見て、無圈点の  $\mathfrak{u}$ ,  $\mathfrak{u}$  を「女性語的」に使用していると言っても不都合はなさそうです。

有圈点新満文に至ると、男性子音字  $\mathfrak{k}$ ,  $\mathfrak{g}$ ,  $\mathfrak{h}$  の後に  $\mathfrak{u}$  を男性母音(われわれは中性母音とみる)として常用するようになるわけですが、「満文原檔」の無圈点満文では男性語の{u}に使用される例は 2 と少なく、有圈点新満文のような用法が無かったことは明らかです。

吉池：早田輝洋(2011b)には母音文字  $\mathfrak{o}$ ,  $\mathfrak{u}$  (o と u を区別しない) が後の有圈点新満文のどの母音に相当するかを調査した表もあります。いま表 2 として引用すると次のとおり

一』大東文化大学語学教育研究所、37-91 頁。

です。{o} {u} {a} はメレンドルフ式ローマ字。【】 は対談者が補ったものです。

表 2. 「(19) 母音文字 o の第 1 音節中の使用頻度」 (早田輝洋 (2011b) 49 頁より)

【無圏点】 o 【ᠪ, ᠸ o/u】	【有圏点】			計
	{o} /o/	{u} /u/	{a} /u/	
男性語	5,008	1,946	626	7,580
女性語 (含中性語)	0	3,407	18	3,425
計	5,008	5,353	644	11,005

中村：表 2 をみると、無圏点の ᠪ, ᠸ o/u を用いて、すべての円唇母音 {o} {u} {a} を表記しようとしたことは明らかです。表 1 と表 2 によると、第 1 冊目の有圏点の {u} の合計は 7,733。{u} に相当する 7,733 のうち、男性語は 1,988、女性語 (含中性語) は 5,745 です。女性語 (含中性語) は 5,745 のうち 40.69% が無圏点の ᠪ, ᠸ で表記されています。女性語 (含中性語) の半分強が ᠪ, ᠸ で、半分弱が ᠪ, ᠸ で表記されています。ᠪ, ᠸ の用い方は中途半端と言えますね。

吉池：たしかに中途半端です。早田輝洋 (2011b) は、このような文字 ᠪ と ᠸ の用法について「筆者としては、常識的な見方だが、/o/ も /u/ も文字 o で表記された、しかし、/o/ でなく特に /u/ を表したい場合に文字 ü 【ᠪ と ᠸ : 対談者注】を用いた、と考えたい。」(49 頁) とします。

中村：以上を要するに、無圏点満文の ᠪ と、ᠸ の一部が、有圏点新満文に引き継がれ、表 2 の ᠪ, ᠸ o/u で書かれた {a} に相当する男性語 626 のうちのほとんどが、有圏点新満文では ᠪ k, ᠪ g, ᠪ h の後で ᠪ ü, ᠸ ü と書かれるようになったということですね。

吉池：そういうことでしょうか。前回確認したことですが、有圏点新満文では、語中の o と u を区別するため、u のほうに点を付して ᠪ u としました。また、男性子音の k と g を区別するためにも点を付して ᠪ g としました。早田輝洋 (2003)<sup>3</sup> は、ᠪ k に母音 u を付して ku を表記する場合、点のある ᠪ u を使用すると、ku ではなく ᠪ go になってしまう。そこで、一画の線を左に付した ᠪ を、点のある ᠪ u の代用として、ᠪ としたと説明します<sup>4</sup>。われ

<sup>3</sup> 早田輝洋 (2003) 「満洲語の母音体系」『九州大学言語学論集』(九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室編) 第 23 号、1-10 頁。

<sup>4</sup> 「満洲文字 u と ü が同じ音素 /u/ を表すのなら、何故、例えば /qu/ を qu の文字で表さず、わざわざ ü のような特殊な文字を、共時的にはあるが、用いたのでしょうか？ 単独で /u/

われはこの説明を了としたわけです。

中村：そういうことでしたね。それでは次に子音文字を検討に入ることにとしましょう。

### 「満文原檔」無圈点満文の子音

吉池：いま『満文原檔』（2005年）所収の荒字檔、戻字檔、洪字檔（一部）により文字表を作成し、それに対する廣祿・李學智（1970）（1971）<sup>5</sup>のローマ字転写を対応させると次のとおりです<sup>6</sup>。順番に検討しましょう。

表3. 「満文原檔」無圈点満文の子音

有圈点新満文の ローマ字	有圈点新満文に対応する無圈点満文の字形		
	頭位形	中位形	末位形
n +母音 +子音			
男性子音字 k, g, h	k,  g,  h	k,  g,  h,  k+子音 ※子音の前のkは“女性形”で点なしであるが一部例外として男性形がでる	k

を/o/と区別して表すときには、文字oに点を附すということが行われる。しかし文字列 qo に点を附すと/go/になってしまう。それ故、/qu/を表すためには文字oに点を附さず一画を付け加えた形の文字uを用いざるを得なかった。即ち、文字uは音素としての独立性がある故にuと区別した文字になっているというわけではない。」（6-7頁）。






<sup>5</sup> 廣祿・李學智（1970）（1971）『清太祖朝老満文原檔（第一冊荒字老満文檔冊）』（第二冊戻字老満文檔冊）』（中央研究院歴史語言研究所專刊之五十八）臺灣：中央研究院歴史語言研究所、中華民國五十九年及び六十年。『旧満洲檔』の、荒字戻、檔字檔、洪字檔（一部）の無圈点満文を、有圈点満文のメレンドルフ式ローマ字翻字を利用して転写したもの。

<sup>6</sup> この文字表は、「満文原檔」中の荒字檔、戻字檔、洪字檔（一部）により作成したものであるが、この三種の檔冊よりも適した檔冊がある。理由は次のとおりである。荒字檔、戻字檔、洪字檔（一部）は高麗紙に書写された天聰元年以降のものであるから、場合によっては有圈点文字が作られたとされる天聰6年（1632）以降に書写された可能性もある。それに対して、明代の公文書を再利用して書写した檔冊部分は天聰元年以前に書写された可能性が高い。理想としては、明代公文書を再利用した檔冊によるべきである。今回そうしなかったのは、荒字檔、戻字檔、洪字檔（一部）の無圈点満文は既に廣祿・李學智（1971）によってローマ字転写がなされているため、第一段階の作業として、この三種の檔冊を利用して進めると便利であるからである。今後は明代公文書を再利用した檔冊の状況を確認する必要がある。早田輝洋（2011a）にも、荒字檔、戻字檔、洪字檔（一部）によった子音文字表がある。われわれの表のまとめ方とはやや異なる。なお、早田氏の表は女性子音字 k, g, h と m の末位の字を挙げるが、われわれは見つけることができなかったため「未見」とした。

女性子音字 k, g, h	ㄐ k, ㄑ g, ㄒ h	ㄏ k, ㄏ g, ㄏ h, ㄏ k+子音 ※子音の前の k(女性形)は点なし	未見
b fi	ㄆ	ㄆ	ㄆ
	ㄆ	ㄆ	
※無圈点満文の Bi は有圈点新満文の bi, fi, pi の三種に対応する			
p	ㄆ	ㄆ ※合字 pu で代用	
s	ㄙ	ㄙ	ㄙ
ś	ㄙ	ㄙ	
t, d +a, i, o  +e, u, (ü)	ㄊ t, ㄊ d	ㄊ t, ㄊ d	ㄊ t+子音 ㄊ
	ㄊ t, ㄊ d	ㄊ t, ㄊ d	
	※頭位では二種の字形が区別なくでる		
l	ㄌ	ㄌ	ㄌ
m	ㄇ	ㄇ	未見
c	ㄑ ㄑ	ㄑ ㄑ	
j	ㄑ	ㄑ (ㄑ)	
y	ㄑ	ㄑ	
r		ㄑ	ㄑ
f -a, e  +o, u, (ü) ※+i はない	ㄑ	ㄑ	
	ㄑ	ㄑ	
	※有圈点新満文の fi は無圈点満文では Bi で表記される		
w +a, e	ㄑ	ㄑ	
-ng		ㄑ ng+子音	ㄑ

nについて




中村：有圈点新満文では次のように<sup>7</sup>、頭位（初頭）と中位（中間）において、母音の上では「有点 n」であり、それ以外は「無点 n」です。もっとも末位（末尾）では稀に「有点 n」がでるようです。

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形
n[n]		 母音の前  子音の前	 (  *稀)







※吉池孝一(2022)の文字表では「母音の上」「子音の上」という表現であるが、分かりやすさということを考え、「母音の前」「子音の前」のように「～前」に変更する。以下同様。

これに対して「満文原檔」の無圈点満文では「有点 n」と「無点 n」の区別はないようです。「満文原檔」のモンゴル語文はどうなっているのでしょうか。

吉池：栗林均・海蘭(2015)<sup>8</sup>によると、「古典式モンゴル文語および現代モンゴル文語では、子音字<n>は、母音の前では点をもつ字形が現れるが、それ以外（子音字の前、語末）では点をもたない字形が書かれる。「文書」（「満文原檔」のモンゴル語文：対談者注）では、音節頭（母音の前）では点をもつ形と点を持たない形の両方が現れる。音節末（子音の前と語末）では点を持たない形だけが現れる。」（19頁）とします。これを要するに、古典式モンゴル文語および現代モンゴル文語では次のようであるが、

頭位形	中位形	末位形
	 母音の前  子音の前	

「満文原檔」のモンゴル語文では「有点 n」は、次のように「無点 n」としても現われるということです。

頭位形	中位形	末位形
 / 	 /  母音の前  子音の前	

中村：服部四郎(1946)<sup>9</sup>によると、「(イ)【有点の n を指す：対談者注】は母音字の前に、(ロ)【無点の n を指す：対談者注】は子音字の前に使われるのが普通であるが、子音字の前に(イ)を使った例も稀にある。」（9頁）。「比較的古い文献には n の字の左側の点が無点である」

<sup>7</sup> 吉池孝一(2022)「満洲字の文字表」『KOTONOHA』第 235 号 (2022 年 6 月) 1-7 頁による。  
<sup>8</sup> 栗林均・海蘭(2015)『『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』（東北アジア研究センター報告第 17 号）東北大学東北アジア研究センター。  
<sup>9</sup> 服部四郎(1946)『蒙古字入門』東京：文求堂。手書きによる横書き。『服部四郎論文集 第二巻 アルタイ諸言語の研究Ⅱ』（三省堂、1987 年）所収。後者は活字による縦書き。



ことがあるから注意を要する。」(9-10 頁)とあります。文献によって異なるようですが、“普通”のありかたとして、古典式モンゴル文語および現代モンゴル文語と、有圏点新満文は同じと言っていいのでしょうか。「満文原檔」のモンゴル語文も、原則は古典式モンゴル文語および現代モンゴル文語と同じということでしょう。それに対して、「満文原檔」の無圏点満文の点の利用の仕方には原則がなく、いずれとも異なるようにみえます。

吉池：「満文原檔」の無圏点満文の点の利用の仕方は、モンゴル語文に依りつつ、子音の前や末位でも、「有点 n」を使ってしまったということかもしれません。

中村：「満文原檔」の無圏点満文と、その後の有圏点新満文とでは、「有点 n」と「無点 n」の用法に隔たりがあることはわかりました。問題は、有圏点新満文と古典式モンゴル文語とが、同じになるのはなぜかということです。栗林均(2014)<sup>10</sup>に「モンゴル文語は 16 世紀末から 17 世紀の初めを境に大きな変容を蒙った。16 世紀後半から、モンゴルにチベット仏教が弘通して大量のチベット語仏典がモンゴル語に翻訳され、仏教經典の写本や木版が作成される中でモンゴル文字の字形や綴り（正書法）、文法が整理され、仏教用語を中心とする訳語集が編纂された。この時代以降の、主として木版刷りの仏典に体现されたモンゴル文語を「古典式モンゴル文語」と呼ぶが、」（1 頁）とあります。この古典式モンゴル文語において、「有点 n」と「無点 n」の用法が確立したのはいつ頃か。また、有圏点新満文の文字法において「有点 n」と「無点 n」の用法が確立したのはいつ頃か。そして両者はどのような関係にあるのかという問題です。

吉池：満洲文字には、モンゴル文字をほぼそのまま利用した 16 世紀末の「無圏点満洲文字」と、無圏点満洲文字に圏点（◦や、などの補助符合）を付して満洲語音の区別に対応するよう改良した 17 世紀初めの「有圏点満洲文字」があります<sup>11</sup>。1632 年（清・太宗の天聡 6 年）とされるダハイ（達海）の無圏点満洲文字の改新の際にどのように文字を整えたか。一度にすべてが整ったとも限りません。私は、古典式モンゴル文語の用法を参照して無圏点満洲文字から有圏点満洲文字を作ったと考えたいのですが、逆に有圏点満洲文字が古典式モンゴル文語に影響を及ぼした部分があるかもしれません。n の点の用法も、有圏点満洲文字が古典式モンゴル文語に影響を及ぼしたのかもしれない。あるいはモンゴル学の研究者にあっ

---


















<sup>10</sup> 栗林均(2014)『孝経—モンゴル語古訳本』（東北アジア研究センター報告第 12 号）東北大学東北アジア研究センター。




<sup>11</sup> 1599 年（明・神宗の萬歴 27 年）、後に清の太祖となるヌルハチ（努爾哈赤）は、大臣のエルデニ（額爾德尼）とガガイ（喝蓋）に命じて、モンゴル語を表記するモンゴル文字を利用して満洲語を表記させた。この時期の文字が無圏点満洲文字とされるものである。1632 年（清・太宗の天聡 6 年）に、太宗のホンタイジ（皇太極）の文字改革の命をうけ、ダハイ（達海）は無圏点満洲文字に丸（圏）や点を加えて発音の違いを明瞭にするとともに漢語からの借用語音を表記するために新たな文字を作った。

では結論がでていないことかもしれませんが、われわれは現在確たる資料を持ち合わせないので、今後の課題ということにしたいと思います。

### k, g, hについて

中村：有圈点新満文の男性文字と女性文字の k, g, h は次のとおりです。「満文原檔」無圈点満文とはだいぶ異なります。

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形
<2種の k, g, h>			
k [q̥]	 a, o, u の前	 a, o, u の前  子音の前	
g [q̥]	 a, o, u の前	 a, o, u の前	
h [h]	 a, o, u の前	 a, o, u の前	
k [k̥]	 e, i, u の前	 e, i, u と子音の前 (  *稀 子音の前)	 (  *稀)
g [g̥]	 e, i, u の前	 *e, i, u の前	
h [x]	 e, i, u の前	 *e, i, u の前	

まず、男性子音  から検討しましょう。中位（中間）にあつては、子音の前で有圈点新満文は  となり左に二点を付します。ところが「満文原檔」の無圈点満文では女性文字  となるようです。興味深い現象ですね。

### 男性語中の子音前の女性文字 について

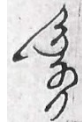
吉池：次に用例の一部をあげます。檔案は手書きされたもので、本行の文と、行間の補筆訂正の文があります。両者には比較的大きな違いがあり、行間の補筆訂正の文には有圈点新満文の特徴がしばしば現れます。それでは、〈本行中の男性語〉 〈本行中の女性語〉 〈本行中男性語の例外〉 〈行間補筆訂正文中の男性語〉 の順に提示します。

〈本行中の男性語〉





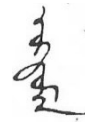
akdabi 頼って



fakcabi 離れて



faksi 巧みな



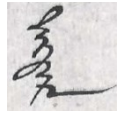
okdome 迎える

※akdabi, fakcabi の bi は有圈点新満文の fi (～して) に相当する。

〈本行中の女性語〉



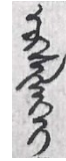
kesiktu 人名



dekdere 昇る



teksileme 整える



uksilehei 甲を着たまま

〈本行中男性語の例外〉 ※この例外の項目については全例です



baksi 人名のバクシ



baksi 博士



bokda 人名



jakdan 地名

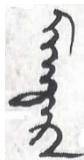


nakcu 叔父

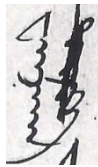
※erdeni baksi 人名。太祖の命でモンゴル文字を用いて満洲語を表記した人物。この人名の登場は多数にのぼる。すべてこの字形となる。

※baksi 博士は jakūn baksi 八博士として1例ある。二点が付されている。

〈行間補筆訂正文中の男性語〉



maktara 投げる



fakcaha 離れた



faksi 巧みな



tokso 地名

中村：〈本行中の男性語〉をみると、たしかに男性文字の  $\text{ᠠ}$  k (有圈点新満文では二点を付した  $\text{ᠠ}$  となるが、二点はない) を使うべきところ、女性文字の  $\text{ᠠ}$  k となっていますね。このような現象はわかりやすいものなので、先行の文献において、すでに言及されているのではないのでしょうか。

吉池：この現象に気づいたときに、私もそう思い、まずは前掲の廣祿・李學智(1970)の解説を開いてみました。それによると「老滿文中において、子音 k が下に母音と接しないばあい、常に  $\text{ᡤ}$  と  $\text{ᡥ}$  は相互に用いられ、ときには  $\text{ᡤ}$  と書き、原則がないようである。」(但在老滿文中，凡 k 字輔音，其下不接元音時，則常將  $\text{ᡤ}$   $\text{ᡥ}$  互用，並有時書爲  $\text{ᡤ}$ ，似無法則可循。) (22 頁) とありました。ただし、この記述は正確ではありません。実際の状況は、“k が子音の前に位置すると本行では通常は  $\text{ᡥ}$  が用いられ、少数の一部の単語に  $\text{ᡤ}$  が用いられる。二点が付された  $\text{ᡤ}$  は極めて稀にしか用いられない (今のところ baksi の一例しか見つけていない。私は二点は後代の書き入れではないかと疑っている)。行間の補筆訂正箇所においては、男性語では  $\text{ᡤ}$  (ときには  $\text{ᡥ}$  が用いられる) が用いられ女性語では  $\text{ᡥ}$  が用いられる。” というところです。

また、河内良弘(1996)の助編者烏拉熙春氏の注記に「ただし音節末子音の場合、 $\text{ᡤ}$  と  $\text{ᡥ}$  との陰陽属性の区別は明瞭ではない。理論上から言えば、 $\text{ᡤ}$  は陽性母音の下につくはずであり、 $\text{ᡥ}$  は陰性母音の下につくはずである。しかし実際には混用されている。特に早期の檔案中ではこの種の混用が極めて多い。甚だしくは同じ単語中の音節末子音 k が、ある時には  $\text{ᡤ}$  と書かれ、ある時には  $\text{ᡥ}$  と書かれる場合がある。」(20 頁) とあります。ここでいう「早期の檔案」が何を指すか明瞭ではないため、はっきりしたことは言えないのですが、男性語中の子音の前の k が女性文字  $\text{ᡥ}$  のこともあると述べているのでしょう。ここで言及されている「早期の檔案」において、 $\text{ᡤ}$  と  $\text{ᡥ}$  が「実際には混用されている」という状況であるとすると、この説明と「満文原檔」(荒字檔、戻字檔、洪字檔(一部))の無圈点満文の状況とは異なります。後者においては、本行は  $\text{ᡤ}$  と  $\text{ᡥ}$  は混用されず、意図的に女性文字  $\text{ᡥ}$  を使用していると言い得る状況です。例外としていくつかの単語において  $\text{ᡤ}$  が使用されます。二点が付された  $\text{ᡤ}$  はほとんど使用されません。

中村：このような「満文原檔」(荒字檔、戻字檔、洪字檔(一部))の無圈点満文の状況が、モンゴル語文の用法を引き継いだものか、それとも「満文原檔」の無圈点満文に特有なものか気になります。

吉池：前掲の栗林均・海蘭(2015)によって「満文原檔」のモンゴル語文をみると、男性語中において子音文字の前で女性文字 g が出現する例、および女性語中において子音文字の前で男性文字 γ が出現する例は少数ながらあります。そのような異例の文字について栗林均・海蘭(2015)はローマ字転写に[!]を付します。当該書のローマ字転写と意味によって例をあげると次のとおりです。

男性語中の女性文字 g+子音の例

女性語中の男性文字 γ+子音の例



γagča 一頭の



degeysi 上方へ

中村：このような例は少数ながら出現するとのことですが、具体的な例数はどのようなでしょう。

吉池：影印とローマ字転写を見比べながら男性語と女性語の中の、子音字の前の γ (g) と g の出現数を数えてみました。

男性語中の、男性文字 γ (g) は 165 例、女性文字 g は 5 例。

女性語中の、女性文字 g は 96 例、男性文字 γ (g) は 1 例。

中村：5 例と 1 例ですか。女性語中の男性文字 γ (g) の 1 例は誤写としていいのでしょうか、男性語中の女性文字 g の 5 例は微妙な数ですね。

吉池：モンゴル語の原文を檔案に写しかえるときに、知らず無圏点満文の子音前での女性文字の用法が反映したため、男性語中の女性文字 g の数が多いようにみえるのではないかと考えています。なおモンゴル文字の女性文字 g と無圏点満文の女性文字 k は同形で ♪ となります。この例数からみて、「満文原檔」のモンゴル語文の文字に、無圏点満文のような用法はないとするのが穏当なところですね。ですから、「満文原檔」のモンゴル語文の文字の用法に依ったとすることはできません。当時の古典式モンゴル文語については、具体的な用字法が分からないので確かなことは言えませんが、古典式モンゴル文語の影響のもとに成立したとされる現代モンゴル文語<sup>1 2</sup>には、無圏点満文のような女性文字 ♪ の用法は見当たりません。

中村：そうすると「満文原檔」（荒字檔、戻字檔、洪字檔（一部））の無圏点満文に特有な用法ということになりそうですね。

先の無圏点満文の例にあがっている faksi (巧みな) の、本行と行間と有圏点新満文の語形を下に引用します。本行と行間の字形ですが、分かりやすさという点では一長一短です。本行の単語は feksi, faksi とも weksi, waksi とも読めます。行間の単語は fanasi, fenesi,

<sup>1 2</sup> 古典期の文字と現代の文字の関係については、前掲服部四郎(1946)に「最初は字の形も畏兀兒字のままであつたが、蒙古人が蒙古語を書くために使ひつづけてゐるうちに、段々形が變つてきて今日の蒙古字となつた。ことに十六世紀の末頃から、形が現代蒙古字に著しく近くなる。」(1頁)とある。

faksi とともに wanasi, wenesi, waksi とともに読めます。行間頭位の子音は、あるいは  $\text{f}$  を想定したもののかもしれませんが字形は微妙であり今は問わないことにします。本行の単語は女性文字  $\text{f}$  を使っているのが子音であることが明らかとなり選択の幅は狭くなります。有圈点新満文では二点を付した子音  $\text{ff}$  を使い、さらに頭位の子音でも  $\text{f}$  と  $\text{ff}$  の区別をすることで faksi の一択となります。



本行の faksi



行間の faksi



有圈点新満文の faksi

吉池：モンゴル語文には男性語中で子音の前に女性文字  $\text{f}$  を使用するという習慣的な用法は無いので、モンゴル語文を参考にして作った早期の無圈点旧満文は、行間の単語のように  $\text{ff}$  を使用したものと想定することができます。おそらくその後、「満文原檔」の無圈点満文にみえるように、 $\text{f}$  を使用する満文がでてきたのでしょう。 $\text{f}$  を使用すると子音であることが一目瞭然なので便利といえ便利です。行間の補筆訂正において  $\text{ff}$  を使用するのは従来の用法がでた形ですが、これは有圈点新満文としての用法でしょう。ただし二点が付いた  $\text{ff}$  は使用しないので、有圈点新満文そのものではありません。

#### 有圈点新満文の子音前の二点を付した $\text{ff}$ k について

中村：現代モンゴル文語では、n の左に一点を付し、子音の前では n に点は付しません。また、女性子音の k と g に点は付しません、男性子音の q と γ (g) は後者に二点を付して q と区別します。もっとも、子音の前と語末では二点を付しません。これをみると、子音の前の子音は無標です。古典式モンゴル文語から現代モンゴル文語に至るいずれの時期にこのような用法が確立したのか知りませんが、有圈点新満文とは異なります。有圈点新満文では子音の前の k に二点を付します。これは有圈点新満文に独自の特徴です。このような特徴がどうしてできたか問題になります。

吉池：「満文原檔」の無圈点満文の男性語中の女性文字  $\text{f}$  k を、有圈点新満文では二点を付した子音  $\text{ff}$  k でそのまま置き換えた、と私は理解しているのですがいかがでしょう。

中村：モンゴル語文の用法からみると、二点を付した  $\text{ff}$  k の用法は特殊なものです。「満文原檔」の女性文字  $\text{f}$  の用法も特殊なものです。特殊な  $\text{f}$  の用法から、特殊な  $\text{ff}$  k の用法ができたという可能性は否定しませんが、いま一つそれを支える資料が欲しいところです。

#### 有圈点新満文の g に付された点 (ゝ) について

中村：有圈点新満文の k, g, h の文字表は、さきに「k, g, h について」の箇所では提示されていますが、再度確認します。

᠎ k, ᠎ k の右に一点 (・) を付して ᠎ g, ᠎ g とし、᠎ k, ᠎ k と区別する。᠎ k, ᠎ k の右に一点 (・) を付して ᠎ h, ᠎ h とし、᠎ k, ᠎ k および ᠎ g, ᠎ g と区別する。

このような補助符号の点 (・) と圈 (◦) の用法は、モンゴル語文にも無圈点満文にもふつうはみられません。有圈点新満文における改新のかなめとなる部分です。これが有圈点新満文で独自になされたものか、それとも何らかの他の文字を参照したのか問題になります。まずは g に付される点 (・) から検討しましょう。日本語の仮名にみられる「か」ka と「が」ga、「た」ta と「だ」da ように、点を付すことによって k と g を区別する濁点符の用法に類似したものです。

吉池：栗林均・海蘭(2015)によると「満文原檔」のモンゴル語文には、<q> と <γ> の左に二点を付す字形と付さない字形のゆれがあるようです。次のような記述があります。「子音字 <q> は、頭位形、中位形、中絶末位形【単語末の母音を分離して書いたため子音が末位形となる：対談者注】が現れる。ほとんどの字形で点を持たないが、中位形で点を持つ形が 1 回だけ現われる。」(41 頁)、「子音字 <γ> は点を持つ形と点を持たない形が現れる。「文書」の中で、点を持つ字形は 7 回、点を持たない字形は 772 回現われる。点を持つ形は母音字 <a> の前に 5 回、子音字の前に 2 回現われる。」(41 頁)。

有点の q が 1 回、有点の γ (g) が 7 回。点の用法に q と γ (g) で違いがあるのか、それともないのか、微妙な数字です。現代モンゴル文語では、男性子音の q と γ (g) は後者に二点を付して q と区別します。このような用法が 16 世紀末から 17 世紀にかけて出てきた古典式モンゴル文語から、現代モンゴル文語に至るどの時期に確立したかについて知り得る資料は我々の手もとにないので、有圈点新満文との互いの影響の有無について言及することは困難です。

中村：現代モンゴル文語は点を付すことによって γ (g) を q から区別し、有圈点新満文は点を付すことによって g を k から区別するわけですから、いずれかの段階で清濁に相当する音を区別しようという発想が芽生えたことは確かです。

点を付して音を区別するという発想自体は、「満文原檔」のモンゴル語文に見ることができます。母音字の a, e と子音字の n の字形は同じなので、後者の n の左に一点を付す。また母音字の a, e と、男性子字の q, γ (g) の中位 (語中) 形 ᠎ は類似しているため、後者に二点を付して ᠎ とし両者を区別した。両方とも左に点を付すのですが、一点で n、二点で q, γ (g) となっているため、両者は混同しません。その区別のしかたは不完全なものでしたが、子音に一点および二点を付して音を区別する発想自体はすでにあつたわけでは

吉池：「満文原檔」の無圈点満文は、点の使い方についてモンゴル語文から学んだわけでは

が、有圈点新満文では、子音の左ではなく、右に一点を付して、頭位（語頭）で ᠠᠭ g, ᠭᠦ g と ᠠᠨ k, ᠨᠦ k、中位（語中）では ᠠᠭᠦ g, ᠠᠨᠦ g, と ᠠᠨᠦ k, ᠠᠨᠦ のようにして、子音どうしを区別しました。

中村：有圈点新満文で、右側に一点を付すようになったことは理解できます。左一点は n を示し、左二点は子音の前の男性子音字 ᠠᠨ k と、少数ながら女性子音字 ᠠᠨᠦ を示します。一点であろうと二点であろうと、これ以上左に点を付すことはできません。つぎに付点をするならば、右側しか残っていないので、右に一点を付して子音のいわゆる清濁の濁を表したということです。

吉池：子音字の右に一点を付すと、母音字 u や e を表すための右一点と衝突してしまいます。そこで、さらに工夫を凝らした。子音字 ᠠᠭ g, ᠠᠨᠦ g の下の母音字 u は有点の ᠠᠨᠦ u ではなく、モンゴル語文で女性母音であった ᠠᠨᠦ u を代用した。ᠭᠦ g, ᠠᠨᠦ g の下では、男性母音 o は出現せず女性母音 u のみ出現するので、点のある女性母音字 ᠠᠨᠦ u は使用せず、点のない男性母音字 ᠠᠨᠦ o で代用したということですね。

なお、子音字 d も右に一点を付して子音字 t と区別するので、右一点の母音字が下に来るばあい、同様の衝突が生じます。t と d については、母音字 e, u, ū の前の t, d と、母音字 a, i, o の前の t, d の字形自体を区別することによって衝突を回避しました。この点については、後に子音字 t, d を扱う際に検討することにしましょう。

中村：いずれにしても、有圈点新満文の g に付された点（ゝ）が、独自の発想によるものか、あるいは他の影響によるものかについては、今後の課題ということですね。

それでは有圈点新満文の h に付された圈点（◦）について検討しましょう。日本語の仮名の「は」ha と「ぱ」pa などにみられる半濁音符の「◦」の用法に類似したものです。独自に発達したものか、それとも周辺の文字の影響によるものかということが問題となります。

### 有圈点新満文の h に付された圈（◦）について

吉池：有圈点新満文が作られた頃の満洲文字と日本の仮名との接触は考えにくいのですが念のために確認します。日本の仮名文字における補助符号の半濁音符（◦）は、室町末期のキリシタン資料からみえ、江戸中期以降に一般化したようです<sup>13</sup>。半濁音符は外見上、有

---

<sup>13</sup>宇野義方編(1984)によると「半濁音符は、室町時代の資料からみえ、特にキリシタン資料には顕著であるが、広く一般化していくのは江戸時代中期以降である。」(89 頁。坂詰力治氏担当箇所)、「半濁音符の「◦」は室町時代末期から半濁音を表すのに使われているが、それ以前には清音の（声調）表示に用いられており、近世では「さ◦」はツア[tsa]を表したこともあった。」(217 頁。沖森卓也氏担当箇所)とある。宇野義方編『國語学』学術図書出版社 2003 年第 18 刷。

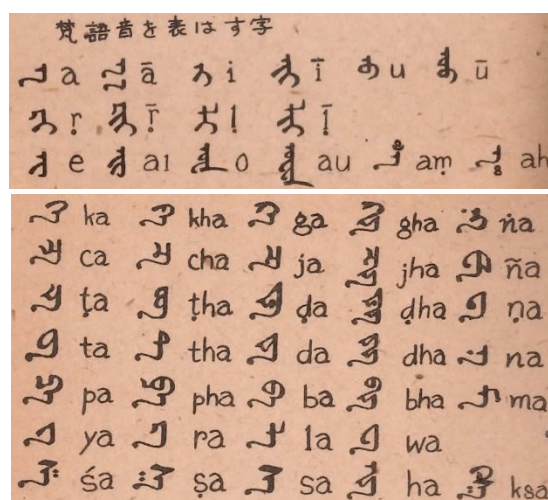
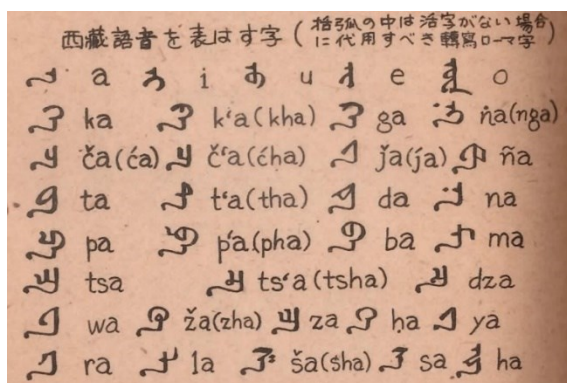


圏点新満文の圏（◦）に類似していますが、半濁音符が一般化する江戸時代中期は1700年頃以降ですから、17世紀初めの有圏点満洲文字よりもだいぶ後となります。

中村：モンゴル文字はどうでしょう。

吉池：モンゴル文字ですが、「満文原檔」のモンゴル語文に圏（◦）はありません。現代モンゴル文語にもないので、現代モンゴル文語につながる古典式モンゴル文語にもなかったと想定していいのでしょうか。ただし、気になるのはガリック文字です。

服部四郎(1946)によると、「蒙古字には、上に説明したもののほかに、ガリック (galik) 字と稱して、經典などで西藏語音や梵語音を表はすため十七世紀の初めに作られた字母がある。次に示すものがそれである。」(22頁)とあります。同頁に掲載されたチベット語音を表す文字と梵語音を表す文字を引用すると次のとおりです。



「西藏語音」6行目の tsha と、「梵語音」5行目の cha の子音部分の左下に「◦」のようにみえる丸があります。これはチベット文字 ཅ, 梵字 ष に対応したものです。いずれも帯気音を表す文字です。また、「梵語音」2行目右端の ah は a+h です。母音 a に、h を表す「8」のような二つの「◦」が付されたものです。この「8」は梵字のヴィサルガ (visarga) 「◌ḥ」(h とローマ字表記される) に相当するものです。母音の後で無声の気音を表すようです<sup>14</sup>。

<sup>14</sup>菅沼晃(1980)によると「ḥ はヴィサルガ (visarga) といい、サンスクリットの単語のなかでは、ふつう母音の後にあらわれ、前の母音をともなった形で発音される。たとえば buddhaḥ は、ブッダハというふうに発音される。」(20頁)。菅沼晃(1980)『サンスクリットの基礎と実践』平河出版社、第3刷1984年による。

J. ゴンダ(1974)は「ヴィサルガ (ḥ) は軽い無声の気音で、文の終わりでは先立つ母音が余韻として響く。」(10頁)とある。J. ゴンダ著、辻直四郎校閲、鏗淳訳『サンスクリット語初等文法』春秋社、補訂第2刷1984年による。



この三者は帯気音と表す文字で、その構成成分として使われています。私は有圏点新満文の h に付された圏点 (◦) と何らかの関係があるのではないかと想像しています。

中村：まず確認しておきたいのは、「西藏語音」の tsha と「梵語音」の cha の子音部分の左下の「◦」は、補助符号として○を付しているのではなく、仮名の「み」の左下のように一筆で丸みを付けているのではないのでしょうか。また、梵字のヴィサルガ (visarga) に相当する「8」も補助符号ではなく文字の本体ともいべきものですから、これらをそのまま有圏点新満文の h に付された圏点 (◦) と結び付けるわけにはいきません。

今の段階では、有圏点新満文で圏 (◦) が用いられるようになった経緯について、なお不明な点が多く、確かなことは分からないということで、今後の課題としたいのですがいかがでしょう。

吉池：たしかに、ガリック (galik) 文字と有圏点新満文で圏 (◦) との関係に限ったことではないのですが、圏 (◦) については不明な点が少なからず残っています。「満文原檔」(荒字檔、昺字檔、洪字檔(一部))の無圏点満文の本行(行間の補筆訂正文ではない)の一部の単語に圏 (◦) を付した ◡ がでてきます。私は後の加筆であろうと思うのですが、そうではなく、有圏点新満文に先立って ◡ が使用された可能性も皆無ではありません。そのことを明らかにするためには、なお幾つかの作業が必要です。その点も含めて、ガリック (galik) 文字が満洲語の帯気音の表記に「◦」を補助符号として利用するという発想の契機となったのではないかという考えも、検討課題の一つとして残しておきましょう。

中村： それでは今回はこれまでとし、次回は子音文字 b, p から始めましょう。